「原爆の日の思い出」

大林　春美（当時 14 歳）

昭和二十年は今でも忘れられない記憶でいっぱいです。当時私は十四才で、三学期から陸軍被服廠へ学徒動員をうけていた。その頃はお国のために勝つまではの合言葉が風びされたが、それがごく当りまえで反論する気持を持たなかった。今なら中学二年生である。幼い子でミシンを踏み軍人さんのシャツを縫っていた。冬の寒い日でも暖をとるものもなく、ミシンの台がたまらなく冷たかった。

いよいよ戦争が激しくなったあの八月六日の朝も、いつものように、陸軍省と染めた鉢巻をきりりとしめて、七時半頃家を出て西条町の学校（校舎が即ち工場）に行くためバスに乗る。丁度その頃 B29 の音が聞こえた。学校に着いた八時過ぎ、ピカッと光ったものを感じた。暫くして広島の方角より黒い雲の固まりのようなものが見られた。学校ではその日も普通にミシンを踏んで仕事を終え、帰路につく。

午後五時西条駅に出て驚いた。駅前は人垣でいっぱいである。どうしたことだろう、列車で運ばれて着いたのは被爆者たちである。担架に乗せられた人は男女の区別がつかない。火傷が身体中で、赤チンキがぬられていた。その火傷は普通のものではない。着たものはたれ下り、肉はだらりとして顔は全く誰であるか判らない。又一つの担架に母と子が抱きあって苦しんでいたのを今でもはっきり思い出す。これらは西条の各病院に収容されたと後で聞いた。その晩になって、ピカドンと言う爆弾が広島に落とされ、街は火の海になったと聞かされた。それからの日々は、毎日広島市に知人を探しに行く人、救護活動に行く人と慌ただしい日が続いた。私の父は二日目に入探しに入市したが、後から歯ががたがたになり、下痢はするし本当の病人になってしまった。

私も学校より救護隊に参加し、炊き出しが主な仕事でした。この間の広島ではこの世の地獄を見た。戦争の恐しさをこの身体で体験しました。川の中で死んでおる人や、家の下敷きで死んでいる人、街中が死人の匂いで、暫くは鼻からその匂いがとれず食欲もなかった。

毎日がひもじい思いをして、これまでに耐え国を挙げて戦ったことが、このような結果になったかと思ったら、少女期だった私も少なからず惨めな気持ちになったことを今でも昨日のように思う。

今年で四十年の歳月の経過は当時の面影はどこにも残っていないが、私共の心の傷は容易に消えるものではない。今尚被爆に苦しむ人を見るにつけ、人の心の教育がどれほど大切かを思う。人の心の痛みの解ることこそが、人としての道を歩けるような気がします。